

妊娠糖尿病における産後 75gOGTT での検討

やまもと くみ かきば としあき
山 本 公 美 垣 羽 寿 昭

キーワード：妊娠糖尿病, 75gOGTT

要 旨

【目的】妊娠経過中に妊娠糖尿病と診断された症例の中に、産後も耐糖能障害が残る症例に特徴がないか検討する。【方法】当院で管理した妊娠糖尿病患者で産後 75gOGTT を行い、インスリン分泌能を評価できた症例につき、患者背景を検討した。【結果】産後 OGTT でインスリン分泌能評価を行った59例のうち39例が正常型 (N 群)、20例が境界型/糖尿病型 (D 群) の診断となった。年齢、家族歴には差はなし。妊娠糖尿病の診断となった妊娠中の 75gOGTT 120分の血糖値が N 群に比較して D 群で高値 ($p < 0.05$) だった。異常ポイント数に差はなし。産後 OGTT でのインスリン値が、N 群に比較して D 群で、0 分値、120分値が高値 ($p < 0.05$) で、HOMA-R 高値 ($p < 0.05$) だった。【考察】妊娠中 OGTT 120分値が高値な症例では産後も耐糖能障害が残存する可能性があり、インスリン抵抗性が病態に関与すると思われる。

【背 景】

妊娠糖尿病の既往のある女性は、将来の糖尿病発症のハイリスク群と考えられており、日本糖尿病学会は産後 1~3 か月、日本産科婦人科学会は産後 6~12週後に 75g ブドウ糖負荷試験 (以下 OGTT) を行うことを推奨している。産後 OGTT で正常型であっても、将来の糖尿病発症リスクが高いため、産後も定期的なフォローが必要であるが、一旦分娩が終了すると、育児の多忙さや病識

不足のためにフォローアップの受診率が低くなり、再評価が困難なことも多い。産後耐糖能異常が残存している症例は、より強固に介入していくことが必要である。

【研 究 目 的】

妊娠糖尿病としてフォローしていた症例の中で、産後も耐糖能障害が残存する症例に特徴があるのか明らかにする。

【方 法】

分娩台帳、電子カルテより、当院で分娩された症例のうち、当該妊娠中に妊娠糖尿病の診断を受

Kumi YAMAMOTO et al.

松江赤十字病院糖尿病・内分泌内科

連絡先：〒690-8506 島根県松江市母衣町200

松江赤十字病院糖尿病・内分泌内科